

足利學校事蹟券  
 川上廣樹著  
 全

洋学文庫  
 文庫8  
 A 200





川上廣樹著

足利學校事蹟考

不知足齋藏梓



序  
眞率

近官置地誌課府縣亦率置一課掌地  
誌編纂事官撰之書體例既嚴求捨宜謹  
作其書者又常在官署中操筆其所託述  
搜地方官申牒不得輒加論斷如戶口幅  
員以其書為心而更古蹟之考則竟不及  
私撰之書之精也詳私撰之書旁徵曲引  
不為體例所拘且以口碑之說及器物文  
券之類證其論斷得以為一家之言而以  
碑之說及器物之類因泚遠方之人



兩能知私撰之書又必成於士人之手  
 下野之利歸人川之廣樹所著有之利學  
 校考一卷予竊疑學校遺蹟會閱其糖  
 蓋以是利學校為古州學之遺制也  
 非於於廣樹也然以廣樹之積學揚摧古  
 今考以史淵考證明晰於是愈信古蹟  
 之考官撰不及私撰而私撰又宜成於士  
 人之手也予好游每游必考古蹟以資學  
 問又訪求地法以自澹常憾之私撰之書  
 顧安得如廣樹者十百人以作郡誌及府

縣誌全國皆有私撰之書而官撰之書有  
 採焉則他日地誌之成將不獲也詳者  
 其及廣樹之來請序其書也書以勗之併  
 以最世之考古者

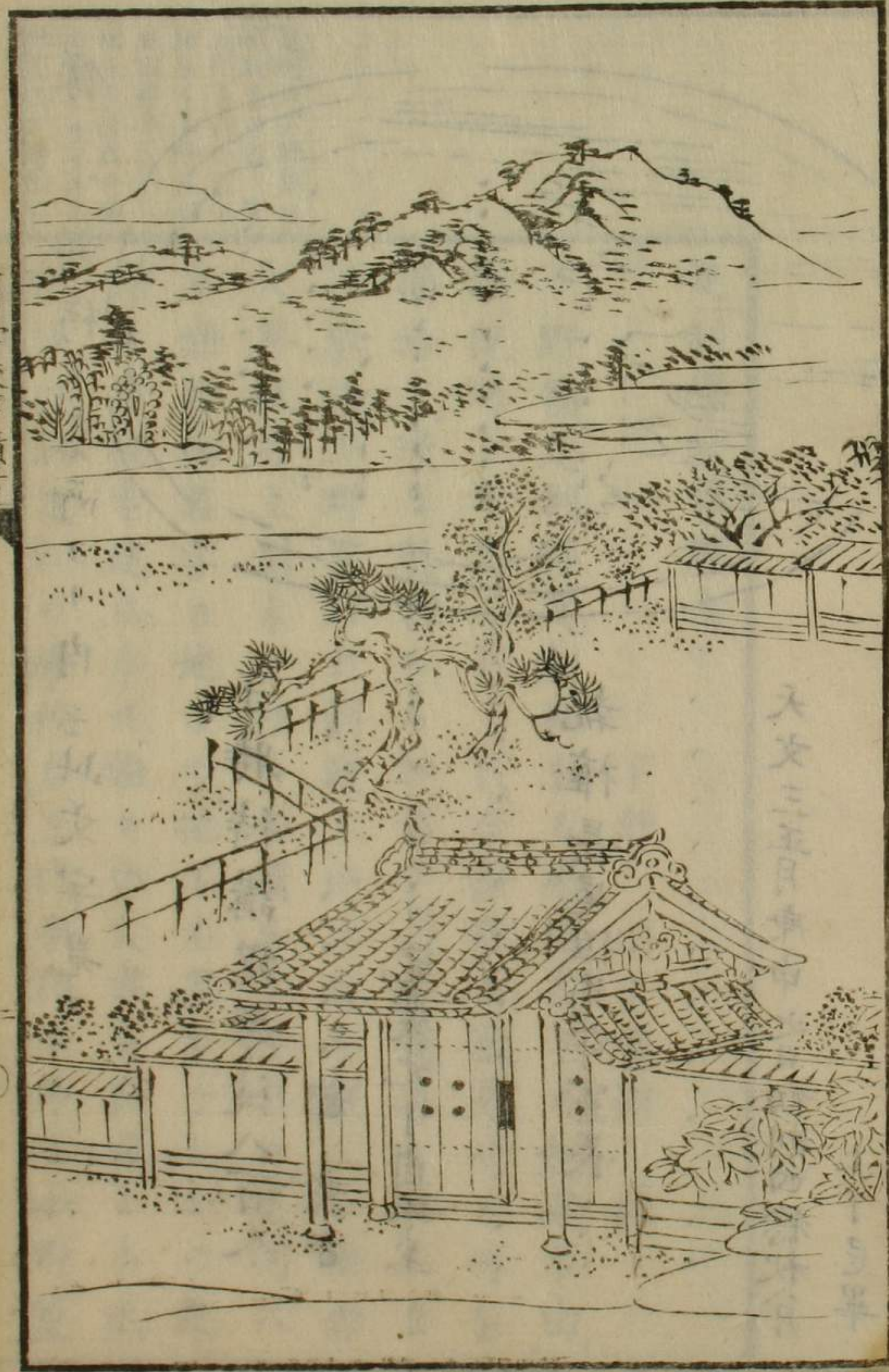
明洪十三年四月  
 十洲仙吏細川淵



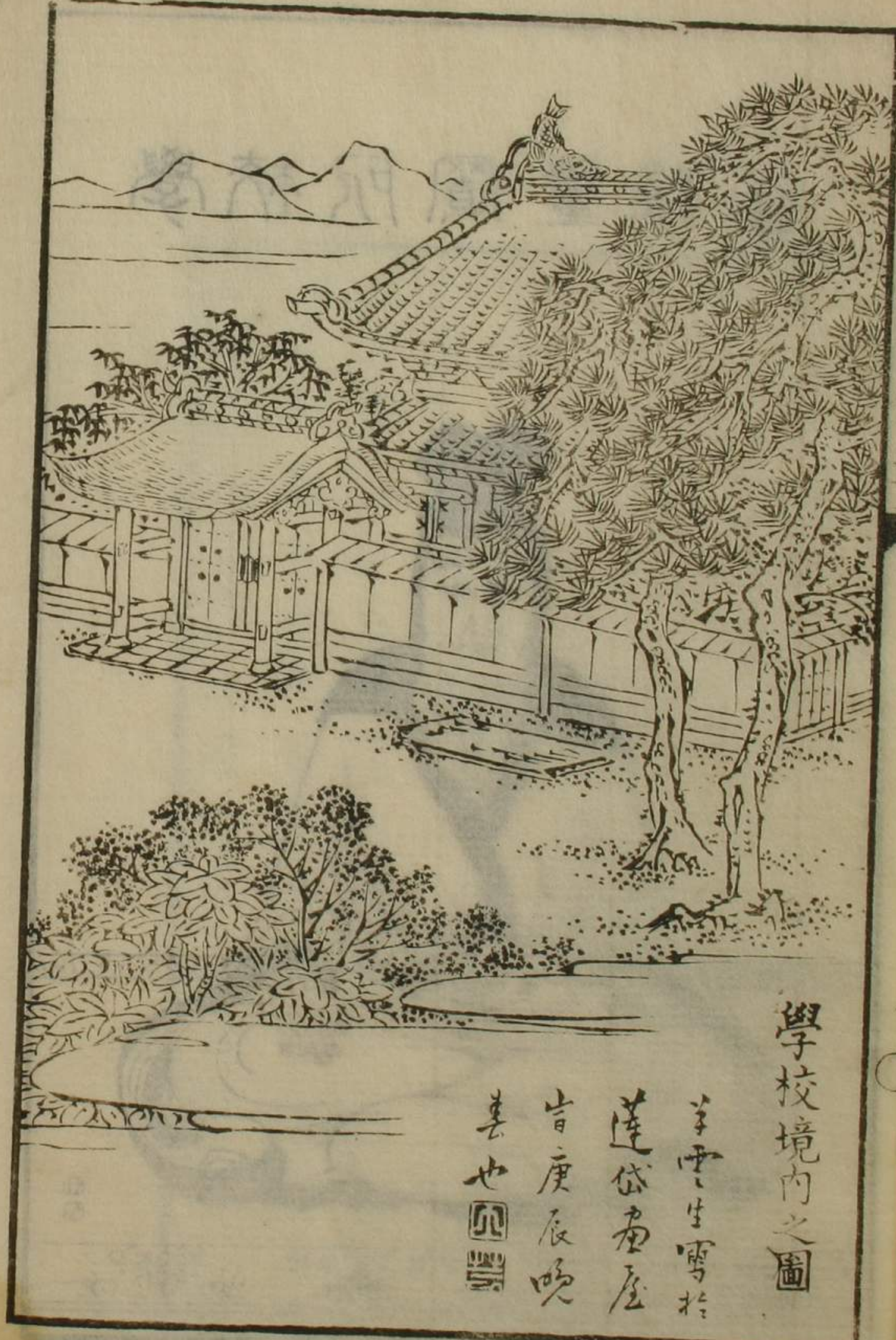








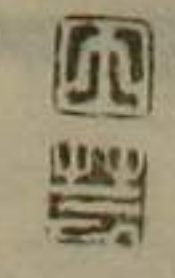
入文三五



凡此皆學校之景

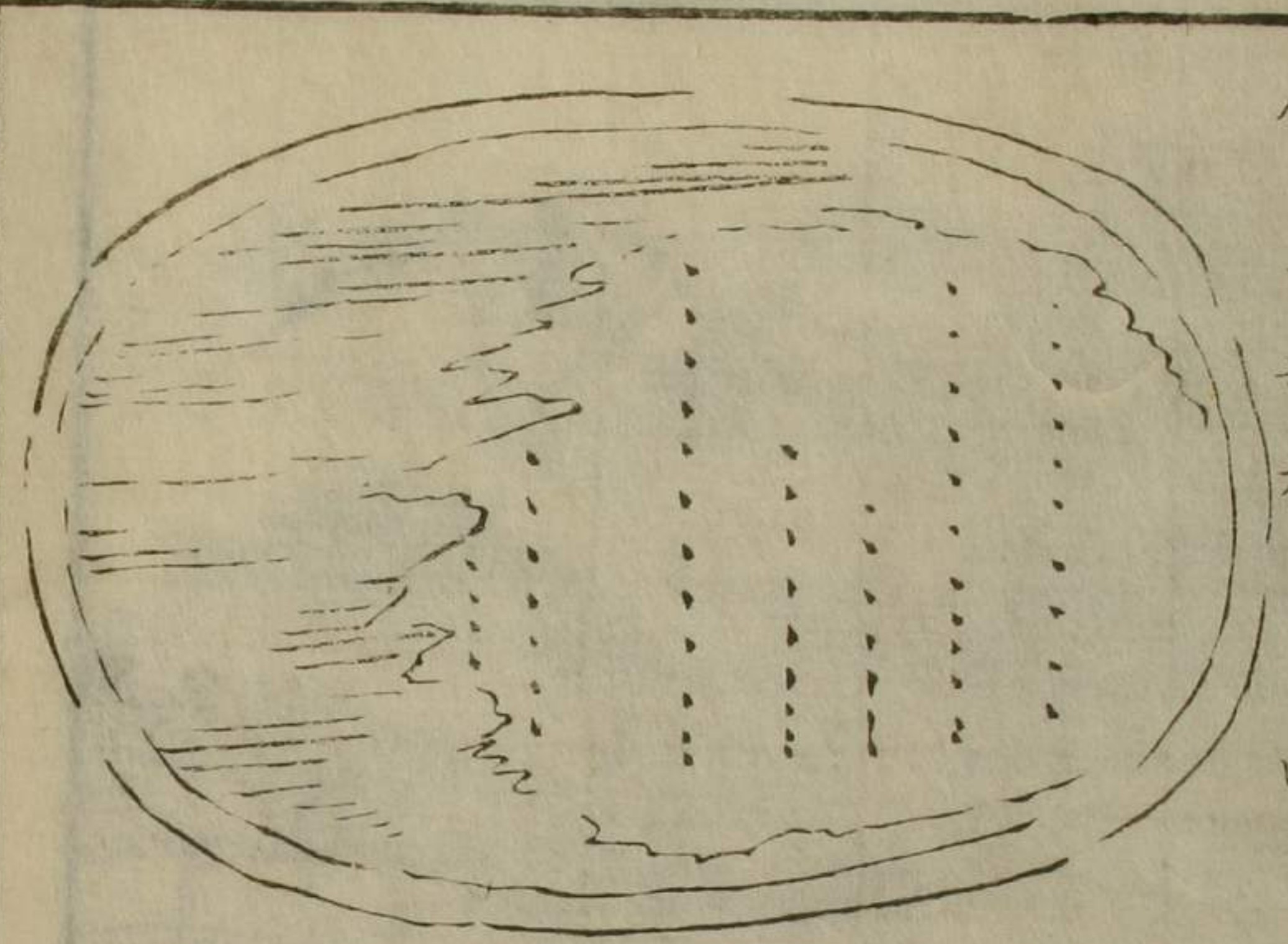
學校境內之圖

羊雲生雪於  
 蓬岱者屋  
 皆庚辰晚  
 善也





像ノ下部朽チタル所ヨリ内ニ此文字見ユ



于時待講筵學徒八百人

、、、、、都良香

、、、、、元慶元丁酉冬至

、、、、、執權長尾但馬守憲長

天文三正月庚申之日初刻四稔秋八月

上丁忌畢

足利學校事蹟考

下野 川上廣樹 編

下野國足利郡足利郷ある學校を、その創建來由、諸説有りて定まらば、今諸書に散見せる所を摘抄し、後、臆案をも加ふる、以て後考に供ふ、まは參議小野篁卿の創建といふ説を載せむ、鎌倉大草紙云、上州も上杉の分國あり、これ、足利の京鎌倉御名字の地にて、他を異ありと、かの足利の學校を建立して、種々の文書を異國より求め、納め、此足利の學校も、上代承和六年、小野篁

足利の下野國足利郡あり、上州といへる、非あり上野國群馬郡白井といふ地、上杉氏の城地あり、此項上下野州を



上杉氏の管さ  
あゝ蘇篁卿は上  
野の國守とあり  
まゝ事あり

快元ハ鎌倉円覺  
寺の僧あり

安房守ハ則憲実  
あり

篁卿ハ諸國ニ學  
校を管みとい  
ふこと何の書  
も見えぬ

上野の國司たり一時建立の所同九年篁陸奥守  
ありて下向の時此所ニ學問所を建たるより  
其舊跡今残ける故應仁元年長尾景久の沙汰と  
して政所より今の所ニ移して建立する迄代  
々開山を快元と申禪僧也今度安房守公方御名  
字のけの地あるはとて學校領を寄進して碑書  
籍を納り學徒を誘ふを云々又王代一覽云  
足利學校ハ篁ノ舊跡ナリト言傳タリ云々  
和漢三才圖會云足利學校小野篁初建之篁小野  
朝臣永見ノ孫峰守ノ子云々營學校於諸國置孔

理真上人を招て  
真言密宗を學び  
しりゆこと其  
概とこるあり  
あり

円覺寺ハ鎌倉五  
山の一あり  
深州帝ハ仁明天  
皇を申奉る  
足利學校書籍目  
録ハ寛政九年丁  
巳ノ記きしもの  
了て例言ハ新樂

子及十哲像令儒學盛行然後世不相續唯存當國  
一所耳是且守明堂儒生乏而入釋氏令兼學焉足  
利義兼再興堂社招入理真上人學真言密宗後成  
濟家僧住持まゝ國史略云篁初讀書下野足利郷  
後人造覺舎于其地所謂足利學校是也まゝ木曾  
名所圖會云小野篁開創の後歳霜ふりて上杉憲  
實再學校を建圓覺寺たり僧を呼ぶ其師とせら  
る云々まゝ山吹日記云足利學校も深州帝の時  
野相公初て建云々まゝ足利學校書籍目錄云淳  
和帝天長九年壬子八月五日大内記參議小野篁

足利學校書籍目録

二〇



奉勅建焉中世喪亂荒廢幾絕後僧快元興復舊在  
國府野後移今地乃足利氏所治處云聖廟所奉木  
像相傳云漢土之作中門扁揭學校二大字明人蔣  
龍溪所書鎮護祠稻荷八幡愛宕三神九華和尚所  
建其屋棟書曰天文二十三年甲寅秋九月乃和尚  
手書也方丈所安藥師佛乃野參議所作云廣樹曰  
以上引ところの書ども皆篁卿の舊跡也とい  
ふり鎌倉大草紙一名太平後記は寫本二冊あり何人の  
作ある故去々永和五年より文明十一年まで  
此軍記あり傳々尊氏末記之遺書而關東大家之

日記也といへり然きとも其記をとおる誤謬を  
きふのに何れん王代一覽以下の書々みぬ鎌倉  
大草紙と據りて書々とのあるべし學校書籍目  
録に志るを古より足利の地といひ傳々  
所々此他の説々を左にのぐ東海談云足  
利學校ハ小野篁ノ旧跡ニ非ス嘗テ此事ヲ胡亂  
ニ思ヒシユエ文徳天皇實録ヲ繕テ篁ノ傳ヲ考  
ルニ陸奥守ニ任セラレシトハ見ユレ下野守  
ニ任セラレシトハ見エズ但古五畿七道ノ諸州  
及ヒ多禰島マデ學校アリシト詳ニ國史ニ見エ



タリ然レハ足利ハ國府カト思ヘハ官府ニモ非  
ス又篁讀書ノ地ナリト云實ナル證據モナシ然  
レハコソ分類年代記ニ足利義兼義康ノ子北條  
ヲ生リ嘗テ學校於足利納自中華所將來先聖十  
哲画像祭器經籍等世推曰足利學校其後百餘年  
而災源尊氏出奔西海與菊池戰于多々良濱時默  
禱孔廟遂得勝矣於是再造聖廟以崇奉之以先祖  
之所叛世々不絶祭祀按ニ此說實ヲ得タリト謂  
ツヘシ胡亂ノ談トセハ請フ一部ノ日本史ヲ看  
ヨクシ漫游花草游毛云足利有鄉學相傳小野篁  
奇賞

山峯美成の提醒  
紀談も漫游文  
草を譯出せり

文徳実録云太宰  
鴻臚館有唐人沈  
道古者聞篁有才  
思數以詩賦唱之  
每視其和常美艷

建焉永享中上杉憲實馬上興學以修之多取古書  
而藏焉至今猶存是以騷客往々游焉聖堂之制需  
星門名曰入徳中門有學校之匾廣門四足名曰杏  
壇重簷兩階四丈而方對楹兩楹步廡後廊其它雖  
非文椽華梁非如妨帽礙眉也以野三位配食蓋野  
公學冠當世至孝純忠優調遣唐副使之選事沮雖  
不超渤海也唐沈道固聞其名廼贈以詩其於配食  
孔廟何有然未聞野公嘗任國司郡司于此土何故  
建學於此是為可疑耳云云上野名跡考の一  
說云足利尊氏將軍ノ草創トモ云云上











案るは此十二氏  
 皇御は從ひ來り  
 一とソハ確たる  
 據かへ國學創  
 建以來學校附屬  
 の者の後をへ

木主今見存焉といへるのこたふり然も東海談  
 等といへるがたとく、篁卿の創立といへるざる  
 のさまと足利氏す、藤原秀卿ふとの草創を  
 所といふは、信トかさし、足利の地古くより口  
 碑は傳るも、いりよと篁卿の創建は相違なきよ  
 一語り傳へたり、かつ學校舊領の地をも、今に至  
 るまで篁卿は隨從して來りし者の遠裔なりと  
 いふは、十二氏大手、神田、細内、宮本、阿部、木村、  
龜田、兩家、石内、兩家、牧野、兩家、  
 大政維新前、僧侶の持ありし頃、學校租稅のう  
 ちにて、其十二氏の者を賑救し來りし事など

此書を草して後  
 文部省刊行の教  
 育史略といふを  
 見しは、足利學校  
 の事をいへる條  
 は上杉憲實の状  
 を引て昔時國學  
 の遺制タルコト  
 疑無シといひり

政所といふハ則  
 國府の事を指す  
 ふるべし和名抄  
 下野國府在都

ゆりとかたふれを以て見まら、古書は明証を  
 といへども、卿の創建と定むるも、妨なきに似た  
 れとも、廣樹はらくかひよ、よ、古も國學の遺制を  
 るべくおぼ、その何を以て知るといふは、本朝通  
 鑑は所引、上杉憲實の状、本朝州學存者僅有數  
 焉、以僧為之主、野之學為最といひり、前見ゆ集  
 古十種印章之部、足利學校の印を載たり、大れ  
 といふ野之國學の四字を刻さる、ま、鑓倉大草紙  
 にも、此學校もと政所ありしよし、故いひ書籍  
 目錄は、舊在國府野ともいひり、國學といはる



賀郡とあり今總社村室八島の隣村に國府村ありこれハ上代國司の政所あり

懷風藻ハ本朝詩集の権輿として淡海の朝より平城の頃まで六十人の詩を集め書あり撰者の名を載せり大文帝の曾孫淡海御船ありつきり林羅山いづり

足利學事考

も國府は建らまゝあり、さて下野國の國府は、都賀郡なれど、上古其地はあり、國學を足利將軍の因縁ある、これ足利の地は移せしからず、小野篁卿も、國學の國府はあるとの故、陸奥守はあり、れ下向の時立寄て何くまの沙汰せられし事もあり、しよとぞおりはる、抑本朝學校の起源を考る、懷風藻序、并り日本紀天武天皇四年の詔、まゝ善相公、意見封事など見えて、天智天武の朝は始まり、文武天皇の大寶年中は、盛んに行われしと見え、大寶の學令は、凡大學國學

毎年春秋二仲之月上、丁、釋奠於先聖孔宣父云々の文と見え、三代實錄、貞觀二年十二月八日新修釋奠式、頒下七道諸國といふ事あり、菅家文草には、仁和二年正月十六日、任讚岐守らし、時州廟釋菜有感の詩を載たり、さて篁卿在世の頃、京の大學ももとより、國學も盛なり、事とそおもはる、それより數百の星霜を経、擾亂の世となり、隨て學政も衰へ、大學をば、め國學といふもの、何處も廢絶したるが、幸し下野の國學のみも、其跡残りたるを、上杉氏の殊勝も、再

足利學事考



興さらきしものなるべし、學校を安置せし所、  
の像といへるも、いつ頃納めし物あるや、定りか  
らば、おりの憲實再興の時より、置しものよむ  
はるべし、像の裏おとに年号の彫附もあし、  
さして古きものとは思はれど、されど集古十種  
肖像の部より、此像をも出されたり、さてその學  
校、足利に移したる始は、今の地より河を隔、足利  
驛の東、岩井村との境邊に、宇學校地先といふ所  
あり、今、大りの渡良瀬川敷となりたると、折々  
布目附たる瓦を堀出さるあり、古學校のあり

志地よりといひ傳へるを、志あるを洪水川缺の  
ため、今の地に移したるも、これと見ゆ、そむいつ  
の頃よりあり、詳ならず、足利興廢記とい  
へる古寫本は、足利五箇ノ郷、先年渡良瀬川洪水  
ノ砌、民家多ク流水ニ曳カレ、居住ヲ失ヒ、皆散亂  
困窮ニ及ヒ、永祿十年卯ノ春ヨリ、廣原ニ新地ヲ  
開キ、浪々ノ民、居住セン事ヲ乞願ノ由、シキリナ  
レハ、則其頃白石豐前守、町田内匠、内田彌六、右之  
趣館林へ披露アリテ、委細ノ沙汰ニ及シカハ、長  
尾殿被聞召、哀憐限リナク、早速願ノ地被下置、疾

上野國邑樂郡館  
林ハ此頃長尾氏  
の城地あり

尾山學堂遺稿



ク民ノ歎ヲ可止トテ、スナハチ安ク其成就ヲ被  
仰付、同年ノ秋已ニ事成テ、本町ニ續テ、凡八町餘  
新町割ヲ定ム、云云、樹志の足利興廢記といふは、廣  
同藩ある服部寛信見とて、抄録といへるは、  
見まら、此頃共ニ學校も移したるも、古は試  
いふのみ、さて上杉が再興して、僧快元校主とあ  
り、そをより僧侶代々を承と、第九世開室和尚の  
時、徳川公は關原の役ヲ從ひ、大ニ眷顧を受、學  
事試興させしことなど、書籍目錄ニ略譜を出し  
たれり、今左ニ抄出せん、第一世快元和尚、不知何

許人、蓋其為人材幹過絶、興久廢之業、修庠序之舊、  
多積典籍、以教生徒、一如儒者事、爾後連綿、以至于  
今、故以和尚為中興祖也、文明元年四月二十一日  
卒、○第二世天矣和尚、肥後人、延徳年間二月十六  
日卒、○第三世南計和尚、不知何許人、○第四世九  
天和尚、不詳姓氏、在永正間、以六月二日卒、○第五  
世東井和尚、諱之好姓、吉川氏、大永□□三月五日  
卒、○第六世文伯和尚、不知姓地、以七月十六日卒  
○第七世九華和尚、諱瑞璵、自稱九華老人、又號玉  
崗、大隅伊集院氏支族也、九華學業尤盛、生徒蓋三



江戸芝切通ふる  
金地院らも将  
軍家城内あり  
て社寺の事務を  
總括せしといへ  
り  
南禅寺ハ京都五  
山のいちり

千、在庠三十年、以天正六年戊寅八月十日卒、年七十九。○第八世宗銀和尚、日向人、在庠九年、以十月廿日卒。不知何年其所筆蓋多、今存者司馬光指掌圖等不一、皆其手書也。○第九世閑室和尚、諱元佑、一名三要、世稱佑長老、肥前小城郡人、年幼祝髮於圓通寺、有奇才、學通内外、遇于神祖、與金地院本光國師傳長老同總管諸寺諸祠、班次十利、歷五山、賜紫、又昇南禅、賜采邑、神祖在伏見、命印行孔子家語、貞觀政要、武經七書等、嘗賜書二百餘部、及活字板。其數萬關原之役、從在軍中、常執蕃策、告占事、賜地於京

圓光寺ハ和漢三  
才因會有一乘  
寺村初在相國寺  
境内往昔下野國  
足利學之中古移  
于此とあり

師建寺、号圓光寺、以為養老之地、附以田地二百石、慶長十七年壬子五月二十日卒於駿府、年六十五、在庠十六年、師有偈曰、万事人間傀儡子、棚頭日々使狂予、言非言是々、何物端的看來、脫有無、師嘗歸鄉於肥前州主鍋島氏、歸依為之、建三岳寺、以師為開山祖、初附以田地二百石、云、○第十世龍派和尚、諱禪珠、武藏人、号寒松、又號鐵子、以命入庠、位建長、兼管長德寺、寬永十三年丙子四月二十日卒、年九十七、師文章縱橫、名于世、有集曰寒松稿。○第十一世明徹和尚、諱祖徒、甲斐人、號睦子、再住建長、寬文

建長寺ハ鎌倉五  
山のいちり

足利學交事考

十一



桂昌夫人ハ徳川  
家五代の將軍綱  
吉公の母堂本庄  
氏あり室永二年

十二年壬寅四月二十七日卒、在庠七年。○第十二世澤雲和尚諱祖允、住禪興、後迁居圓光寺。元祿三年庚午十月八日卒、在庠四年。○第十三世傳英和尚諱元教、號外子、初在南禪、乘佛位、禪興、寛文七年丁未、請諸朝重修聖廟諸宇、官賜銀、以給其費、因佶長老之舊也。時公卿大夫多附、書籍及祭器者、以貞享四年丁卯三月二日卒、在庠十一年。○第十四世久室和尚諱元要、俗姓茂木氏、本郡五十部村人、位建長号琢子、元録年間、桂昌夫人嘗賜黄金、以修堂宇。正徳三年癸巳十二月二十一日卒、在庠三十六

六月述と桂昌院  
と盛と

年。○第十五世天叔和尚諱元倫、号篤子、姓栗原氏、京西桂村人、正徳間、以命助金地某、司修記録事、々畢、賜銀二百、以賞其勞、享保十年乙巳正月廿一日卒、年六十二、在庠十五年。師晚有疾、甲辰正月以後、事務盡、以弟子月江攝行、以終身。○第十六世月江和尚諱元澄、号淳子、武藏八王子人、其師天叔有病、請于朝、以師攝行、事務及天叔卒、更有命為主、位口寶曆五年乙亥口月口日卒、學校中興以來、庠志譜牒、散亂無統、師求索考定、輯録、以藏、爾後年名事跡、得以考云。○第十七世千溪和尚諱元泉、号悦子、

足利桂昌院書積考

十二



足利學式と題せ  
る写本一冊あり  
廣樹先年東京の  
市にてこれを得  
たり此書ハ教員  
の式を書きたるも  
のて未だ學校  
の規則并生徒の  
職掌などを記  
せりそれ寛政  
五年癸丑冬十一  
月と記しあれハ  
第十七世千溪和  
尚の特定めし  
のありされハ其  
頃の學生もあり  
て教育を行ひし  
ものと見えたり  
近來より川缺  
學田の入り川缺

本郡五十部村人、歷禪興位、建長、天明九年、有疾告、  
老、事務盡委、弟子青郊、寛政七年乙卯十二月二十  
五日卒、先是寶曆四年甲戌四月廿三日、雷震災、方  
丈庖廚、月江請再建、於朝、未果而卒、至師之時、有命  
建而賜之、○第十八世青郊西堂、以上書目中、載  
る所あり、十九世ハ、其人を詳なき、二十世太齡、  
二十一世松嶺、二十二世を謙堂といふ、僧の庠主  
たりし、ハ、六の謙堂の代まであり、徳川公幕府た  
りし時、獨禮の格にて、毎春年始の參賀、出府  
し、恒例に依り、年筮を將軍家へさし、出さる、

の為損毛多し  
て追々生徒を養  
ふ事も能はれ又  
遊學の者もなき  
ゆゑ夫々寥々衰  
微して遂に浮屠  
氏の卷の如く  
あり行あり

領主足利藩主も同く年筮を贈り來り、明治元  
年大政を一新されし時、舊足利藩主、戸田忠行  
侯、學校の衰廢を患ひ、再興の事を朝廷へ奏  
請し、則委任の命を蒙られ、藩より教頭助教、置  
き、士民を教育し、あつ、秩奠の典をも興せり、その  
後廢藩置縣の命ありて、朽木縣の所轄となる、そ  
の時聖廟及び附属の書籍器物も悉く朽木縣へ  
引渡り、よち、同六年、公立尋常小學校を學校  
境内へ設き、今時盛し生徒を教育せり、左とど聖  
廟の方々、追々、敗頽せる、頃日足利市中にて、

足利學校事情考



金澤文庫は北條  
 越後守実時の孫  
 越後守顯時の子  
 金沢越後守貞頭  
 といふ人金沢の  
 称名寺といふに  
 建たる文庫あり  
 此人金沢に住ま  
 る故に家号を金  
 沢といふ

有志輩の打寄り、聖廟保存の事を議し居たりと  
 承りぬ、さて上代に諸國に在りしといふ學校  
 皆廢せ、金澤文庫といふも、古くより廢絶  
 し、跡も無くありし、獨この足利のみ、  
 現存せるも最も尊き事あり、さき元龜十  
 五年、小早川隆景、筑前國名島に居らまし、足利  
 學校に倣し校舎を建て、士衆に教養し、釋奠の禮  
 を行ひしとぞ、筑前のも今如何に成行しや知ら  
 ざれども、足利より今日まで、其遺跡の存を認め  
 と、豈一快事ありや、

右此一巻は、おのまけ抄く學校の事蹟、これかき、  
 人に問えり、おとあり、依りてかきおのりて  
 答辭に代り所あり、古書籍器物おとの事ハ、下  
 野國誌に山吹日記を引て詳の也、よりて今  
 大略を略す

明治十二年十月上澣 春山迂人川上廣樹



（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, mostly illegible due to fading and ghosting.)

附録

本篇に記載する聖像の裏の文字は于時侍講延  
 學徒八百人とあり、其あとを拭消する様にて、  
 いろよとも讀み、都良香元慶元年丁酉冬至  
 と記さるる、墨色前の文字よりも新らしく見ゆ、  
 良香は、清和天皇の貞觀十四年、大内記文章博士  
 として、越前權守と兼られ、陽成天皇の元慶三年  
 に卒せられたり、小野篁よりい聊後の人なり、元慶元丁酉冬至  
 とも、釋菜までも行なむ、時記したるなり、む、さ  
 まむ、此像もと京地にあり、そのりて、後今の學

足利學堂書目 附録

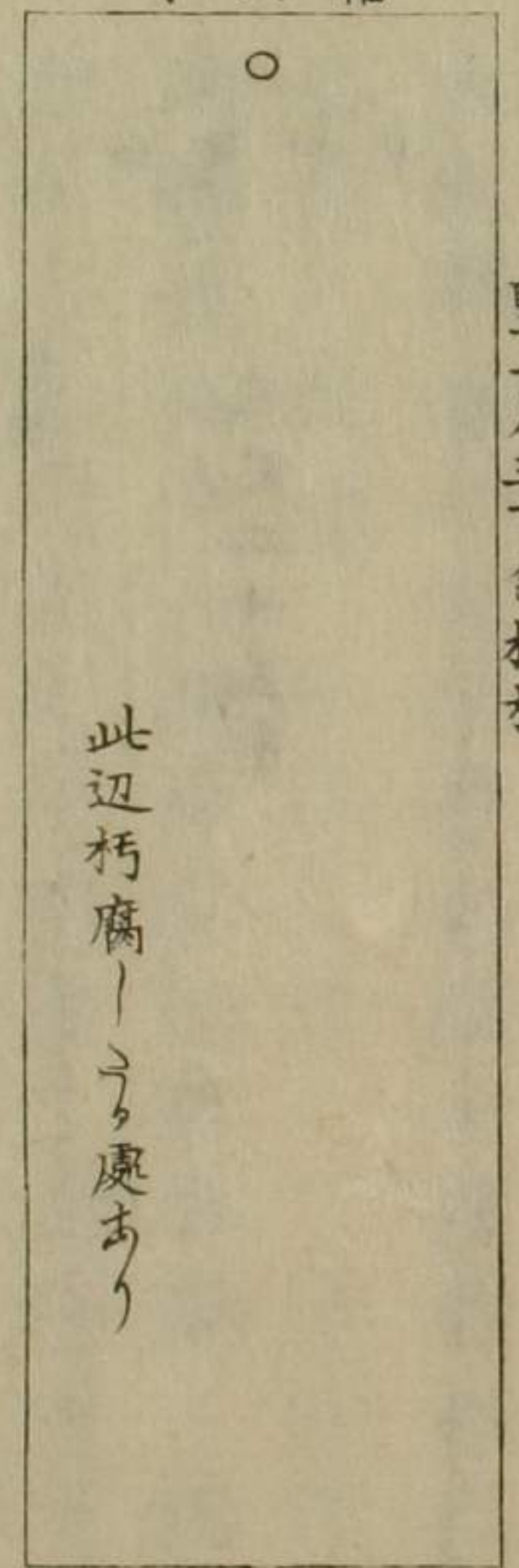


校に置れしものれその傳來今大體を詳しし  
たし次の執權長尾但馬守憲長といふも上杉氏  
の宰臣なるべし後の天文三正月庚申之日初刻  
とあるも、このなる義もや詳しありし、四稔秋  
八月上丁忌畢といふも、則春秋二仲之月上丁の  
日は釋奠を行ふも古禮なりせば、八月上の丁日は  
祭を行ひて記したるものなりべし、  
鎮護祠を建立する時の文、聖廟改造の時此銘文  
等を板に書きたるも數枚あり、其文も甚だ見る  
に堪へざるものなれど、考古の一端なりを左に

掲

竪一尺三寸余松板

幅六寸



此辺朽腐しうら處あり

吾朝自天照皇太神宮歷代及人王矣爾來有八  
幡大菩薩令加護本朝衆生學校之内勸請神靈  
小社之年代又故無小社古跡傳聞之而已謹奉  
按神体畫像今移于稻荷大明神社壇之旨趣  
別□□記之□汚穢伏願



足利學堂實錄 附錄

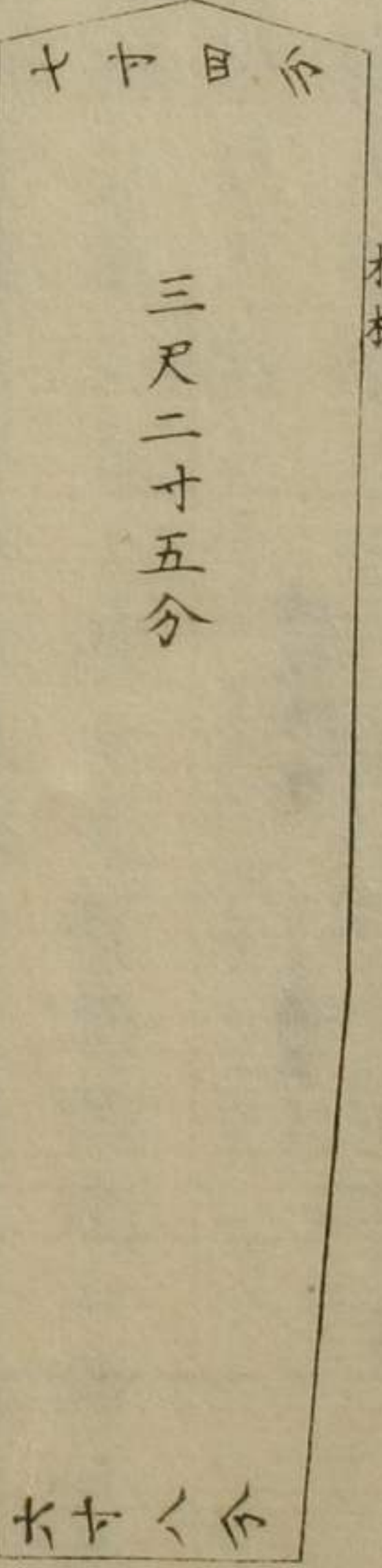
庠門吉祥駢集富貴增長壽筭綿延學業永劫至  
祝々々

大隅產島津的孫釋玉崗瑞璵九華誌之

天文廿又三歲次甲寅秋九月吉

案考々々玉崗和尚乃第七世々々之禪主也

松板



大日本國野州足利郡學校重建

聖廟上梁銘

本朝學黌之設往昔尤盛今僅所存之者足利而  
已矣 欽惟

大壇越征夷大將軍右相君辱降 鈞旨 賜銀

若干令施修鳳之手於茲乎令郡主土井氏能州

刺史命家臣督其事殿堂門廡不日而成可謂治

世之懿美亦復在此舉也爰臨上梁之辰聊綴俚

語式志歲月云 銘曰

足利故郡 學有校庠 誰創其址

小野氏篁 丕開講席 鼎建廟廊

足利學堂實錄 附錄 三



足利學交書續考 附録 四

依仁義道

遊禮樂鄉

春秋二仲

釋祭

素王

鶯轉綠樹

燕吟彫梁

至治之音

盈耳洋洋

澤施四海

化被八荒

鈞命茲降

革築高堂

綽々餘祐

兼新寶坊

伏冀

上梁之後

柱礎鞏固

邦國禎祥

杏壇騰茂

祖苑聯芳

民物惟阜

子孫益昌

嘉運悠久

名齡無疆

寬文第八龍集 戊申孟夏吉祥辰

住持比丘 元教謹誌焉

右の裏面↓

下奉行

岡田善兵衛重次

同 柳田與惣右衛門重常

大和國長谷住人大工

澤村佐兵衛藤原久宗

案より此時の將軍家々嚴有院殿徳川家綱より土井能州といふら此頃足利を領き諸侯を

足利學交書續考 附録

四



元教之第十三世傳英和尚也

松板

三尺二寸五分

水 中 小 右

水 中 小 右

聖像遷座之祝語

茲安置于唐土之聖像官封于宋朝之書籍而稱  
扶桑之舊釁者足利而已幸存也欽惟  
征夷大將軍內府大君為修繕聖廟辱賜黃金若

于仍斧斤之功既成實一洗腐朽而再令改觀矣  
仲秋吉辰備芳馨旨酒珍菓為遷座之儀以伸禱  
祭可謂仁政之恩澤及萬邦者也 祈所乾健坤  
順國家禎祥

皇帝敢保萬歲之寶祚

台齒增長千秋之壽量 次冀町村鎮靜黍稷芬

芳遷座之後 聖德益昌永使方來友學而禮容

詳肅拜肅享至祝至當 俚語曰

官命茲降修廟堂門欄改觀發輝光林頭莞爾直

如在室內肅然占考祥遠近才人開講習都鄙賢



客献文章芳筵永會方来友學業勉焉起野庠  
安永八己亥年仲秋初五日

當庠董席千溪元泉悦子謹誌

右の裏面

始終兩度安永七年戊戌九月十四日破損所御見分  
安永八年己亥十月朔日出来榮御見分

御見分御代官 宮村孫左衛門源高豊

安永七戊戌年十一月廿七日 金貳百兩被下置也

下奉行

庠内弟子青郊元牧

庠内茂木豊藏久隆

大工當所住人

林嘉右衛門益道

案考りよ此時の將軍家は俊明院殿家治なり千  
溪を十七世の庠主なり

松板

三尺二寸八分

文宣王上遷座記

足利學者天長中奉 敕命野相公所創業也而



聖像者華人彫刻也然不知何時代曾官封於傳  
來古書并宋板經籍等者也既歷千載今存者斯  
賢也越寬政三辛亥年二月泊享和元辛酉年兩  
回命臣僧牧辱賜黃金若干使修繕  
大成殿及門廡文庫寶坊倉廩寮舍百工速來土  
木功成洗剝舊腐再復壯觀仁政膏澤德溢四海  
於是壬戌夏五月吉辰謹薦蘋蘩藻菜清酌庶品  
上遷座以伸祭儀伏願天長地久民富國優  
皇祚萬歲  
台齡千秋

昭々聖德猶日月照下土涵々末學恭冬夏事進

修 俚語曰

大君有命

修理大成

殿堂改觀

棟梁施瑩

釋菜三獻

春秋二丁

道德配天

元亨利貞

絃歌遺澤

文教宣明

享和二壬戌歲仲夏吉辰

董席青郊元牧謹識

右の裏面

下奉行 茂木善次久敏



同 木邑連治 緑

大工 林嘉右衛門

左官 茂木小右衛門有秀

大工 初谷茂右衛門方英

案より此時の將軍家の文恭院殿家齊なり青  
郊より第十八世の庠主なり

松板

三尺三寸

ヤ ヤ

ヤ ヤ

文宣王上遷座記

當學校者天長中奉 敕命野相公所創建而安  
置中華傳來之 聖容日往月來既歷九百八十  
有二霜而今見然馬道之大原實出於天天何言  
哉乃以聖傳聖德巍巍難名儀範百王而師表萬  
世者也於于爰伏惟 内府大君命臣僧和辱賜  
黃金若干令修繕 大成殿及門廡文庫寶坊倉  
廩祭厨寮舍修葺損壞而土木功既成可謂治世  
壯觀也嘗文化辛未十月令辰謹備蘋蘩粢盛清  
酌式為上遷 座之儀仰願風雨順調五穀豐登



皇帝萬歲寶祚鞏固

名齡千秋福祿延長

萬世永賴聖人之功與天地隆令末學進修禮容

肅々矣 俚語曰

皇々聖德

國家日安

柳營降命

廟堂改觀

頓遷寶座

肅禮神壇

仁恩洪大

通徹心肝

崇文化八<sub>未</sub>年十月吉辰

董席實巖宗和謹誌

右の裏面

下奉行

茂木善次又敏

匠工初谷茂右衛方英

次匠窪田住

近藤孫八

左官本町住

茂木小右衛門有秀

案より將軍家は前々お形、實巖といふ其人  
と詳々を記すに、十九世の庠主なり。



足利學交厚責芳 附録

さて今現存する聖廟は此時營繕せられたるものなるべし

附録畢

明治十三年  
同 年

出版御届  
板権免許

著者

朽木縣  
野州足利郡小俣村  
川上廣樹

出版人

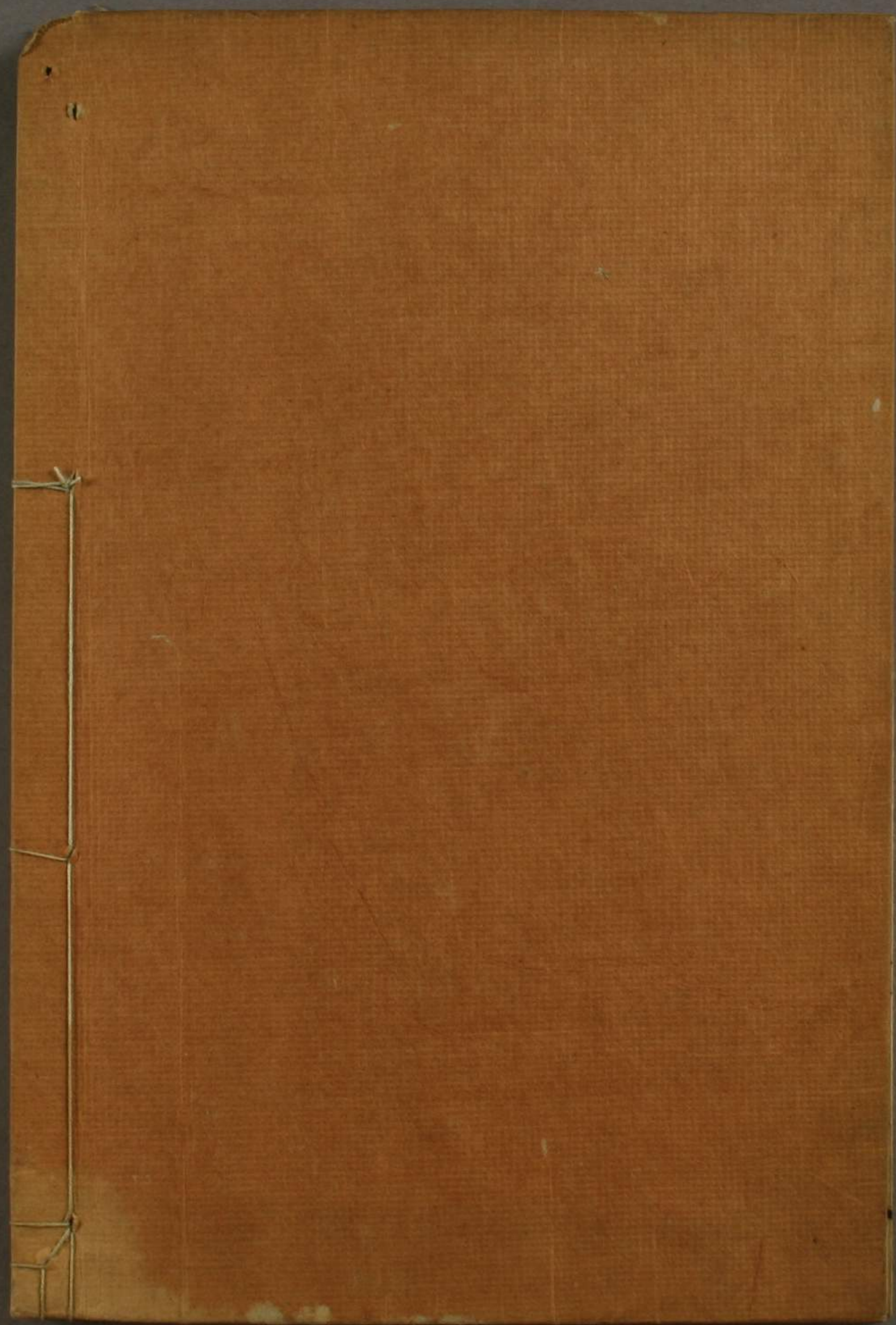
同  
木村勇三

画者

同  
足利町  
田崎芸

足利學交厚責芳







上廣樹著

足利學校事蹟考

不知足齋藏梓

大槻文庫

418

253



